



中島 晴美、増殖するかたち—2023、2020
磁器、H73 × W62 × D51 cm

中島晴美：50年の軌跡

2020年10月2日（金）— 11月7日（土）

現代美術 艸居

605-0089 京都市東山区元町381-2

開廊時間：10:00AM-6:00PM 定休日：日・月



プレスリリース

大学3年生の春、京都市美術館で観た走泥社展の衝撃が私の「生き方」を決めた。その後の制作の日々は、陶の立体造形作品の虜になった私の「心の奥底を覗く」ことだけにあったように思う。粘土の可塑性と焼成に寄り添いもたれるように身を任せた時もある。時には反発し抑え込もうと格闘し、もがいた。

時は過ぎ日常性の中での50年に渡る制作は、理性にコントロールされた「理想」を織り込むことも必要ではないかと、かたくなに貫いた素材に対する態度も緩む。

「無心につくることで粘土と一体となり、本能のうごめきや、自覚のない本性が曳ずりだされる。」そんな陶芸の有機的で生の魅力は「今を生きる」若者の作品に任せて、私は「綺麗ごと」の中で制作してみようかとぼんやり思うのである。

— 中島晴美

この度、現代美術 艸居では「中島晴美：50年の軌跡」を開催致します。大学在学中の作品から現在の新作まで、50年の制作活動を振り返る前代未聞の初個展となります。

熊倉順吉氏に師事するきっかけかつ制作活動の起点となった作品「魂」(1971)。師の「誰にもない自分だけの造形論をつくっていくのが作家だ」という言葉を実践するべく、土と対話し、自身を作品に織り込んできました。土と触れ合い魂を吹き込むことで自身の存在を確認する。本作を出発点としてその後も「純粹培養」(1980)、「うふふ」(1984)「コスモス色の羽を持つ鳥」(1986)などを世に送り出しました。2002年にはオランダにあるヨーロッパ・セラミック・ワーク・センター(EKWC)に招聘されたのを機に、陶土から磁土に素材を変えて磁器の手捻り形成に打ち込むようになりました。今展では中島にとっての大きな転換期となった2000年代の磁器作品「WORK-0506」(2005)も、最新の磁器作品とともにご覧いただけます。

土の可塑性に向き合い、自身の「心の正体」を魂のざわめきに導かれるかのように表現してきた中島晴美。常に進化を繰り返し、開いてきた境地は並大抵のものではありませんでした。葛藤、潔い決断。誰に媚びることなく「やきもののなかで何をつくるか。」と自問自答を繰り返し、中島自身の有機的形象を確立しました。本展を通し、土の性質に本能的、肉体的、そして瞑想的に委ねられた中島の魂と生き様を感じていただけることと思います。

作家紹介：

中島 晴美 (なかしま・はるみ)

1950年岐阜県生まれ。1973年大阪芸術大学デザイン科陶芸専攻を卒業後、信楽にて制作。1976年より多治見市陶磁器意匠研究所勤務、2003年には愛知教育大学教授として勤務し、現在は多治見市陶磁器意匠研究所所長を務める傍ら、岐阜県恵那市にて制作を行う。

受賞歴は1980年毎日ID賞特選2席受賞、1995年国際陶磁器展美濃'95陶芸部門金賞受賞(1989年同銅賞受賞)、2010年日本陶磁協会賞受賞。収蔵先に東京国立近代美術館(東京)、岐阜県現代陶芸



美術館（岐阜）、金沢 21 世紀美術館（石川）、エバーソン美術館（シラキュース・アメリカ）、ファエンツァ陶磁国際美術館（イタリア）、ヨーロッパ・セラミック・ワーク・センター（オランダ）、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（ロンドン）、上虞青現代国際陶芸センター（上虞・中国）、清華大学（北京）など、ほか多数。

是非、貴誌・貴社にてご紹介いただけますと幸甚に存じます。
掲載用、写真の貸出などご質問がございましたら下記までご連絡頂けますと幸いです。

プレス担当：元林久美子

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東入ル元町 381-2

motobayashi@gallery-sokyo.jp

Tel: 075-746-4456 Fax: 075-746-4457

展示作品紹介（一部）：



魂、1971、陶、H42 × W40 × D25 cm

中島が大学三年生の春、走泥社展の刺激を受けて初めて作ったオブジェ。当時の美術教育は、西洋美術ばかりだったが、中島は走泥社の作品の中に日本人の美意識を感じ共鳴した。



純粹培養、1980、陶、H45 × W30 × D42 cm

「可塑性のある土で作り、焼成する陶芸の造形は有機的である。それは、成長し増殖する。そして、変容する。」と中島が確信を持った作品。「余分なものを排除して、純粹培養すれば本質が見えるのではないか。」



うふふ。、1984、陶、H39 × W42 × D43 cm

陰も陽も含めた十数点の個々の作品が集まって一つの作品です。

熊倉順吉の作品と言葉に影響を受けて、中島の知らない「内なる自分」を覗いてみようとした。作家自身は「明るく楽天的であると思っていたが、反面に少しねっとりとしたものがあるかもしれない。」と。陽と陰。正と負。+と-。太陽と月。



コスモス色の羽を持つ鳥、1986、陶、H84 ×
W60 × D58.5 cm

中島のその当時の家はぼろぼろだったが、庭にコスモスをいっぱい咲かせていました。そのような背景を元に制作した作品。



Bag of Mr. Duke、1990、陶、H80 × W73 ×
D45 cm

ヘミングウェイの小説「日はまた昇る」から。鞆シリーズは評価されたが4点で制作をやめる。それはやきものでなくても表現できるもの、言い換えれば素材を一つに限定する意味を感じないものはつくらないとの作家の決意であった。



内なる自己、1992、陶、H62 × W73 × D79 cm

走泥社の作家はろくろの口を閉じてオブジェを作った。と解説した評論家がいた。元々焼き物はうつわである。中が空洞であるのに彫刻のようにマッスに見せるのは不自然である。中島は「中が詰まっていないのに詰まっているような作品は陶の造形ではないのではないか。」と、このころに制作した作品は口を開く造形にした。これ以降すべて口を閉じることはやめた。



WORK-0506、2005、磁器、H61 × W42 × D70 cm

東京国立近代美術館工芸館の開館 30 周年記念展「工芸の力ー21 世紀の展望」に出品。中島は、図録に「軟弱者」とのコメントで素材を磁器に変えた理由を説明した。

『軟弱者。』

素材を磁器に変えて 5 年になる。焼き物の世界に入って以来、一筋に手捻りによる立体造形作品を制作してきたが、いつのころからか磁器への憧れが芽生えてきた。動機は確かに陶器の制作で味わってきた私の経験の中にある。それは、さながら土器から陶器、磁器へと、より焼き締めてガラス

化を求めた焼成の歴史を辿るようでもある。私の求める白は、化粧土によるうわべの白ではない。芯から表面まで全体を支配する白でありたい。私の求める質感は、もっと硬質で光を透かすほどに焼き締め、凜としてありたい。そんな磁器への憧れが抑えきれなくなったのである。この 5 年間は悪戦苦闘の日々であった。陶器での制作で獲得した成形技術や、焼成技術が通用しないのである。素材を一つに限定して制作する陶芸の造形は、その不自由さをも受け入れ、素材の声を聞くことが



不可欠である。しかし、それにしても磁器の記憶現象は手強い。紐で積み上げていく過程を形態の奥深くに記憶し、どんなにきれいに仕上げをしても、抑え込んでも、なだめすかしても焼成とともに顔を出してくるのである。頑固なまでの記憶現象や、我儘で決して媚びない素材の魅力に負けないで、私自身を織り込まないと私が制作する意味がない。あくまで主役は私なのだ。とはいえ「素材の魅力にもたれて漫然と制作してはならない」と、肺腑をえぐる自問の最中に「磁器だって生身の温かい血が流れている証じゃないか」と、惚れた弱みが顔をだす。抑え込むことばかりに躍起にならず、少しは大人になって磁器の魅力を活かしてみよう。遠くで「軟弱者」との声が聞こえる。』



不条理を内包する形態-1211、2012、磁器、 H53
× W41 × D64 cm

いくら澄ましてみても不条理へのいら立ちはあふれ
出てしまうのです。



内なるかたち-02、2020、磁器、H65 × W28 × D28 cm

粘土の可塑性は成長し増殖する生命体のかたちをつくる。そして変容する。それは、人間の内なる本能を炙り出すことに繋がるが、中島はそこに理想を込めたいと思った。言い換えれば、本能と理性のせめぎ合いの中で内なる「私」をかたちにした作品。



増殖するかたち-2023、2020、磁器、H73 × W62 × D51 cm

大学3年生の春、京都市美術館で観た走泥社展の衝撃が中島の「生き方」を決めた。その後の制作の日々は、陶の立体造形作品の虜になった「心の奥底を覗く」ことだけにあった。粘土の可塑性と焼成に寄り添いもたれるように身を任せた時もある。時には反発し抑え込もうと格闘し、もがいた。時は過ぎ日常性の中での50年に渡る制作は、理性にコントロールされた「理想」を織り込むことも必要ではないかと、かたくなに貫いた素材に対する態度も緩む。

「無心につくることで粘土と一体となり、本能のうごめきや、自覚のない本性が曳ずりだされる。」そんな陶芸の有機的で生の魅力は「今を生きる」若者の作品に任せて、「綺麗ごと」の中で制作してみようかと中島は思うのである。